

山田正隆訳『回世美談』と明治初期翻訳小説

Kaisei Bidan, or Robinson Crusoe Translated by Yamada Masataka:

Translation of the Western Novel in the Early Meiji Period

はじめに

デフォー Daniel Defoe の『ロビンソン・クルーソー』*The Life and Strange Surprising Adventures of Robinson Crusoe* (二七一九) は、幕末期にオランダ語の訳本を通して翻訳され、他作品に先んじて一定数の読者を獲得した西洋小説であった。最初の翻訳である黒田行元(麴廬)訳『漂荒紀事』は嘉永年間(一八四八〜五四)にはすでに成立し、安政四年(一八五七)には児童向けの簡約本を翻訳した横山保三(由清)訳『魯敏遜漂流行紀略』も出版された。明治十年(一八七七)から十一年にかけて出版された山田正隆訳『回世美談』^一は、これらに次いで登場した、初めての英語からの翻訳であった。

『回世美談』は、和紙使用の活版印刷によって出版された。巻頭に置かれた「回世美談凡例」(以下「凡例」)に、「全本ヲ分ツテ六十回トシ一回以テ一巻トシ則全本六十小巻トス而テ各月二回ヲ発兌スル所ナリ^二」とあるように、全体を六十回に分け、一回分を一冊とし、毎月二冊出版するという計画であったが、実際は、第一回が明治十年十二月^三、第二回が翌年一月、第三回が同年三月、第四回が同年六月^四と、半年間で四冊の刊行に終わった。この間、第二回までは大倉孫兵衛^五、第三回からは巖々堂と、発兌元の書肆も交代した。

現在、本書の所蔵が確認できるのは、管見の限りでは国立国会図書館のみである。このことから、流通量が多くな

飛田 英伸

TOBITA, Hidenobu

一 『回世美談』に言及する先行研究としては、柳田泉『明治初期翻訳文学の研究』(明治文学研究第五巻、春秋社、一九六一)、豊田実「イギリス漂流物邦訳考」(日本英学史の研究)、千城書房、一九六三年、橋口稔「日本における『ロビンソン・クルーソー』」(外国語科紀要、英語教室論文集、三十一巻三号、一九八四年二月)、宇佐美毅「Robinson Crusoe」の明治期翻訳をめぐって——表現構造が作り出す世界——(『国語と国文学』第六十六巻三号、一九八九年三月)、高橋修「(人称)の翻訳・序説——明治初

ったこと、同時代の文学への影響も大きくなかったことが推測されるが、文学史的に見れば、本書は明治以降の翻訳小説の成立と展開を考える上で重要な手がかりとなる。本論では、これまで明らかにされてこなかった訳者山田正隆について明らかにした上で、幕末期の翻訳と比較しつつ、その翻訳がどのような場で成り立ち、どのような性格を持つものであったのかについて検討したい。

一、杏園山田正隆

内務省の『版權書目』第五号（明治十一年三月）において、訳者の山田正隆は「静岡県士族」と記される。また、第二の表紙左下には「杏華園刊行」とあるが^六、発兌元の大倉孫兵衛が「杏華園」を名乗る例はないため、「杏華園」は、出版人も兼ねていた山田と関係する名称であることが推測される。

静岡県士族と「杏華園」につながる人物として、旧幕臣で杏園を号とする山田正隆という人物がいる。山田杏園について記した重要な資料としては、まず、国会図書館所蔵の『杏園山田先生家系略』（明治二十六年）がある。これは幕府の医官を務めた菅原正方（山田宗円）を祖とする家系をまとめたもので、荻生徂徠に学び、儒官となった正朝（麟嶼）や、『傷寒論』の研究で知られた正珍（凶南）らの伝記が略述される。彼らの子孫に当たる杏園の本名は正隆で、その履歴は次のように記される。

○正隆正教長男 杏園賢子

明治元年家督更ニ徳川藩ニ帰参シ父ヲ草加駅ニ辞シ東京ニ出テ儒ヲ業トス夙ニ海保漁村先生ノ門ニ遊ヒ兼テ大学
南校ニ英学ヲ修メ内務ニ属官タリシ拓落意ヲ得ス明治十一年英華学舎ヲ設立教授ニ従事ス^七

『杏園山田先生家系略』の奥付には「英華余芳第六号附録」と記される。『英華余芳』とは杏園が開いた英華学舎発行の会員制作文投稿雑誌であり^八、この家系略は杏園の門人たちが著したものであった。

この山田杏園については、成瀬麟・土屋周太郎編『大日本人物誌』（大正二年（一九一三））にも略歴が記される。

期翻訳をめぐって」（『国語と国文学』第七十巻五号、一九九三年五月）、新熊清（『翻訳文学のあゆみ——インソップからシェイクスピアまで』（世界思想社、二〇〇八年））などがある。

二 『山田正隆訳「回世美談」』第一回（大倉孫兵衛、明治十年）。第二回以降は明治十一年出版、第三回と第四回は巖々堂より発兌。以下、同書からの引用は回と頁のみを示す。

三 『朝野新聞』明治十年十二月十三日広告による。

四 『出版書目月報』第六号（明治十一年六月分）による。

五 第一回の発兌書肆は、奥付に記載されず、前掲『朝野新聞』広告には、「通一丁目 万書堂」と書かれる。当時、万書堂を名乗った書肆には別所平七がいるが、これは湯島の書肆であり、広告の万書堂は大倉孫兵衛のことだと考えられる。大倉は錦栄堂を名乗ったが、当時はまだ書物の出版に乗り出したばかりであり、こうした名前が広告に

君は東京の画家なり旧幕儒管麟^{トウリン}岐の孫、嘉永五年九月五日生る、通称正隆杏園は其号維新後開成校に修め明治七年以来教部省内務省等に歴任し十九年春私立哲学学校を創設し後進を誘掖薫陶す二十一年以降五十嵐竹塙に就き南宗画の筆法を学ぶ方今日本美術協会、日本南宗画会翼画会員にして日本赤十字社員、衛生組合長、日本橋呉服町交義会長たり嗜好、和歌を好み現に和歌奨励会員にして斯会の為に尽す所ありといふ其著に勤学捷徑、幼学文語、至道^{トウダウ}等あり(東京市日本橋区呉服町八)九

ここに挙げられる杏園の著書名は、正確には、『勤学捷徑』(明治三十三年)、『幼学文語』(明治二十二年)、『至真論』(明治三十五年)である。『勤学捷徑』と『幼学文語』が漢文と英文の学習法を述べた書物であること、『幼学文語』に著者を「静岡県士族」とする奥付があること、それが大倉孫兵衛から発展した大倉書店から発行されていることは、杏園が『回世美談』の訳者であることをうかがわせる。

さらに、『回世美談』奥付の訳者の居住地が英華学舎の所在地と一致することも、これを裏付ける。奥付には「第一大区四小区美土代町三丁目四番地」(第一回)とされる一方、英華学舎の所在地は、明治十二年十一月二十八日の『読売新聞』の広告欄に、「本日本校儀両替町九番地へ移す 美土代町 英華学舎」とあり、同じく神田美土代町にあったことが記される。

以上から、『回世美談』の訳者は山田杏園であると判断できる^{一〇}。それを踏まえて、さらにいくつか情報を加え、『回世美談』成立期を中心とする履歴を以下に改めてまとめておく。

杏園山田正隆は、嘉永五年(一八五二)九月五日、医学館の教諭であった山田正教(天保六年〜明治十三年(一八三五〜一八〇〇))の長男として江戸に生まれた。父の正教が勤めた医学館は幕府直轄の医学学校であったが、山田は年少期、医学館直舎の儒学教授も務めた海保漁村に漢学を学んだ。英語を学んだのは維新後のことであり、新政府が幕府から引き継いだ洋学校、開成校ないし大学南校においてであった。その名称から判断すると、在籍期間は、明治二年初頭から四年末頃までの間に収まることになる。出仕前の彼の動向には不明な点が多いが、官員録等の記載によると、廃藩置県後の籍は浜松県に置かれており、明治九年八月の同県の廃止に伴い、静岡県士族となった。

山田は、寺社行政や国民教化を統括した教部省、およびそれを引き継いだ内務省社事務局に出仕した。『大日本人物誌』は、教部省への出仕を明治七年からとしているが、東京大学史料編纂所所蔵『教部省職員録』において名前が初めて確認できるのは、明治八年十二月五日改のものにおいてである。これ以後、官員録では、九年十二月十八日出版御届の西

現れたのではないか。なお、大倉孫兵衛については、『大倉山論集』第五十四輯(二〇〇八年三月)参照。

六 なお、国会図書館所蔵本の第一回は表紙左下が欠損しており、記載の有無は確認できない。

七 松井力太郎・岩村鑑太郎・工藤龍太郎(杏園山田先生家系略)(工藤龍太郎、明治二十六年)。

八 『読売新聞』明治三十一年八月三日に広告がある。

九 成瀬麟・土屋周太郎編『大日本人物誌』(八絃社、大正二年)、「や之部」五五〜五六頁。

一〇 なお、杏園の出仕と同時期に内務省警視局に勤め、後に福井県三方郡長などを務めた山田正隆は広島県士族であり、『回世美談』の訳者とは別人である。ルイブル社出版部編『大日本人物名鑑』(ルイブル社出版部、大正十五年五月、一四六〜一四七頁参照)。

村隼太郎編『官員録』まで名前が確認できる。この翌月に当たる十年一月十一日の太政官布告第四号によって教部省は廃止され、内務省社寺局が設置されたが、それと同時に、一時的に官員録への氏名記載が見られなくなる。これは、人員整理による一時的な免職に遭ったためだと思われる。その後、十一年九月出版の大崎清重編『明治官員録』において内務省社寺局の一員として再び登場し、十九年二月出版の彦根正三編『改正官員録』まで名前が確認できる。『回世美談』の出版時期は、教部省が廃止され、一時的に官員録への氏名記載が途絶えた時期と重なる。

英華学舎を設立したのも、明治十一年かその直後のことであった。『文部省第六年報』附録の「明治十一年中学校一覽」によると、英華学舎は、教員一人、生徒三十四人となっており、山田一人を教員とする小規模な私塾であったことがわかる。この英華学舎で学んだ人物に、博文館の創業者大橋佐平の甥で、洋紙販売業の博進社で社長を務めた山本留次がいる。明治五年に新潟長岡で生まれ、二十年に叔父とともに上京した山本は、翌年博文館が日本橋に移転してから十年間、出勤前、朝五時から「経済、歴史、英語などに就て講義」^一を受けたと言う。英華学舎はこの山本のように、小学校を出た後、働きに出た者にとつての勉強の場として機能していたと考えられる。英華学舎で用いられたらしい「山田の『幼学文話』が、「今幼学諸氏の為さねばならぬ学は各其職に依て異同あることではありますすが之に用る文は恐は和漢英の三種の外には出さるまじと存じます」^二のように、学習者の「職」に言及していること、全体が「です」「ます」を用いて初学者に語りかけるように書かれていることも、それを裏付ける。

官職を退いた山田は、英華学舎での教育活動に従事するとともに、明治二十一年からは、五十嵐竹沙の子、竹鳩に就いて南宗画を学び始め、美術界にも進出した^三。晩年の活動は文人的な性格が強く、「一時二十首詠（大正七年）」「時雨の落葉」（大正十四年、同十五年）など、サークルで詠んだ和歌を集めた私家版の歌集を編んでいる。没年は正確にはわからないが、『社団法人日本橋区衛生協会治革誌』（昭和十一年（一九三六））所収の「日本橋区衛生協会役員功労物故者氏名」の中に名前が確認できる^四。山田は昭和二年に同会の評議員に選出されており^五、昭和初年までは存命であったことがわかる。

以上のように、山田は、国民教化を管轄した教部省に出仕するとともに、私塾での教育活動を行った人物であった。厳密に言えば、『回世美談』の刊行が始まったときには、彼はおそらく官界におらず、英華学舎もまだ設立されていなかったが、彼が教化や教育と関わる場にいた人物であったことは『回世美談』の翻訳にも影響したと考えられる。それを確かめるために、まずは次章でその前史となる幕末期の『ロビンソン・クルーソー』受容について明らかにしておく。

一一 山本留次「環境を支配し得るに至る修養法」『実業の世界』第三十二巻十九号、昭和四年十月、八一頁。

一二 浜田徳太郎編『山本留次翁言行録』（博進社、昭和二十九年）、一六、一七頁。

一三 山田正隆『幼学文話』（大倉書店、明治二十二年）、一頁。

一四 たえば、明治三十六年十一月から日本美術院が他の美術団体と合同で毎月開催した二十日会では、会計掛になるとともに、新作批評に複数回出品したことが確認できる。日本美術院百年史編集室編『日本美術院百年史』第二巻下（日本美術院一九九〇年）、五五―九八頁。

一五 正本嘉久四郎編『社団法人日本橋区衛生協会治革誌』（日本橋区衛生協会、昭和十一年）、七三頁。

一六 同、二九頁。

二、蕃書調所の読書空間

『漂流紀事』の訳者である黒田行元は近江膳所藩士で、適塾に学んだ後、嘉永元年（一八四八）に江戸に遊学した一七。『漂流紀事』はこの遊学中に成立したとされる一八。『漂流紀事』は写本として流通し、その文体は「我祖父ノ名ヲ魯敏孫ト云其名ヲ以氏トス一九」のような漢文訓読体であった。漢文訓読体は、学問の場で用いられた文体であり、翻訳にも一般的に用いられた。写本として流通したことからして、黒田が翻訳に際して想定した読者の範囲はそう広いものではなく、洋学に触れる者に限られていたと考えられる。

『漂流紀事』には、デフォーの名は記されず、「魯敏孫嘔瑠須」と書かれた。黒田の理解がどうであったかは直ちには断言できないが、少なくとも『漂流紀事』の読者の中にそれを「魯敏孫嘔瑠須」という実在の人物の手記として読んだ者がいたことは、明治五年に『漂流紀事』を斎藤了庵訳『魯敏孫全伝』として出版した高田義甫が「英人嘔瑠須原書ヲ斎藤源訳シ候書ヲ校訂ス」（文部省『准刻書目』明治五年九月）と届け出ていることからうかがえる。

一方で、『漂流紀事』として訳されたものが「魯敏孫嘔瑠須」の手記ではなく、アレキサンダー・セルカーク Alexander Selkirk という人物の体験をもとに書かれた創作であるという理解も幕末期に成立した。寛政の三博士の一人古賀精里の孫で、安政三年（一八五六）開設の幕府の蘭学研究教育機関、蕃書調所において初代頭取を務めた古賀謹一郎（茶溪）は、その理解に至った一人である二〇。『和蘭宝函』と呼ばれた雑誌二一の記事を中心とするオランダ語文献を古賀が漢訳してまとめた『度日閑言』（慶応三年（一八六七））の第十八巻には、セルカークの事跡を述べた『和蘭宝函』の記事が「孤島僻栖」という題で取められ、「アレキサンデル・セルキルク」（二十二丁裏三三）の事跡が「ダニール・デ・フー所著世間通知の小説文ロビンソン・クリュースト伝」（ダニール・デ・フー著す所、世間通知の小説文ロビンソン・クリュースト伝）（十三丁表）となったことが記された。古賀は、オランダ語蔵書がある蕃書調所という場にいたことよって、『ロビンソン・クルーソー』が実在の人物の手記ではなく、「ダニール・デ・フー」の「小説文」であることを明らかにしたのである。

注目すべきは、古賀が、ニューウェンホイス Gt. Nieuwenhuis の学芸辞典二四の記事からセルカークの事跡がデフォーによって小説化されるまでの過程を抜き出し、『和蘭宝函』の記事の後に補足として付したことである。引用の後、古賀は次のように述べる。

一七 黒田については、黒田次郎「黒田麴蘆の業績及其著書」（『芸文』第十七巻九・十号、一九二六年十月）、平田守衛「黒田麴蘆の業績と『漂流紀事』」（黒田麴蘆と『漂流紀事』第一巻、京都大学学術出版会、一九九〇年）参照。

一八 平田前掲書、五頁。
一九 平田前掲書影印京都大学附属図書館所蔵安中本による。平田前掲書、二七一頁。

二〇 筑波大学附属図書館に古賀の書き入れがある『漂流紀事』写本が所蔵されている。

二一 *Nederlandsch nagedrukt, ter oorspining van algemeene en nuttige kundige helden.* Amsterdam, 1834-1839.

二二 朝倉治彦「ロビンソン翻訳の一資料に關聯して」（『明治文化資料叢書』第九巻翻訳文学編「風聞書房、一九七二年」所収月報、一九頁参照。

二三 「度日閑言」第十八巻（国立国会図書館所蔵写

小説家往々敷衍失事実。而傳播之久、人不能分其真偽。是有識者……常所嘆。噫廿年前、読ロビンソン伝、驚其奇、疑或西人弄筆、非実事。今読本条、而知果皆妄。夫セルキルク四年辛苦、其功難泯。而撰空名、以謀攘其美紊其実、フー之心何如耶。(小説家往々にして敷衍して事実を失う。而して之を傳播すること久しくして、人、其の真偽を分かつこと能わず。是れ識有る者の……常に嘆く所なり。噫廿年前、ロビンソン伝を読み、其の奇なるに驚き、或いは西人の弄筆にして、実事に非ざるかと疑う。今、本条を読み、果たして皆妄なるを知る。夫れセルキルク四年の辛苦、其の功泯び難し。而るに空名を撰し、以て其の美を攘み、其の実を紊さんと謀る、フーの心何如や。)

(十九丁表)

古賀が言う「廿年前」は、『度日閑言』の成立時期から考えると、『漂荒紀事』の成立が推定される嘉永元年頃に当たり、『漂荒紀事』が古賀の周辺で成立したとも推測される重要な記述であるが^{二五}、さらに注目すべきは、古賀が小説を其事がもとになって成立するものと考え、セルカークの事跡がもとになってデフォアの小説が書かれたことを、その枠組みにおいて捉えていることである。このような小説観は小説を「稗史小説」とも呼ぶ漢文脈の思考に属するものであり、古賀において、セルカークの事跡とデフォアの小説との関係は、たとえば『三国志』と『三国志演義』との関係に対応するようなものとしてみなされたのであった。

その際、古賀が事実を歪曲したとしてデフォアを非難するのは、「改其地所姓名及困厄事、而名其勇士為呂敏孫、而因颶風与船壞泊加來比設群島之一島上。又敷衍寂寞孤島、為廿八年、而變全紀事、為十八世事(其の地所姓名及び困厄の事を改めて、其の勇士を名づけて呂敏孫と為し、而して颶風と船壞とに因りて加來比設群島の一島上に泊まらしむ。又た寂寞の孤島を敷衍し、廿八年と為し、而して全紀事を変じ、十八世の事と為す) (十九丁表)」というデフォアの創作が実事をなおざりにするものと思われたからであろう。古賀の翻訳には「呂敏孫伝、為十八世之始現世、許多捏虛小説事之名也(呂敏孫伝は、十八世の始め世に現る、許多の捏虚小説事の名たり) (十九丁表) や、「奈此人野鄙心十分、將盜取本事実、編出一小説、而返原本于海客也(奈せんや、此の人、野鄙心十分に於て、將に本事実を盜取し、一小説を編出せんとして、原本を海客に返すなり) (同) のように、デフォアに対する批判が如実に表れている。こうした非難の言辞は漢文脈における実事と小説の関係と、デフォアにおける題材と創作の関係との懸隔を示すものともみなせようが、ともかく、古賀は『ロビンソン・クルーソー』を漢文脈の小説観に基づいて理解したのであった。

漢学が学問の基礎であった当時において、古賀の読み方は、学問を積んだ者たちの間では一般的なものであったと考

本。以下、本書からの引用は丁のみを示す。

二四 Gr. Nieuwenhuis, *Algemeen woordenboek van kunsten en wetenschappen*. Zuyphen, H. C. A. Thieme, 1820-1829.

二五 黒田は嘉永六年に古賀と会っており、蕃書調所が洋書調所と改称した文久二年(一八六二)に古賀の請け合いによって教授手伝として出仕を命じられている。亀田前掲論文、八六、八七頁、平田前掲書、一八〇、一九、二八、七六、七七頁参照。

えられる。学問の場である蕃書調所は、そのような読書様式を有する者たちが集まる場であり、オランダ語蔵書は、小説に対応する実事を明確化する材料を提供するものとなった。蕃書調所の読書空間は、幕末における『ロビンソン・クルーソー』受容の最前線にあったのである。

安政四年出版の横山保三訳『魯敏遜漂流行紀略』も、蕃書調所に出仕した川上冬崖が挿絵を描き、同所で教授を務めた箕作阮甫が序文を書いたことが示すように、蕃書調所を母体として成立したものであった。冬崖については、安政五年正月に出された館市右衛門による売弘願に「蕃書調所絵図懸り／川上芳之丞蔵板」、右同人方同居／横山保蔵^{〔二六〕}訳述とあり^{二六}、出版の中心人物であったことがわかる。

『魯敏遜漂流行紀略』では本文の後に「附載」として「孤島僻栖」と同じニューウェンホイスの学芸辞典の記事が引かれ、「アレキサンデル、セルキルク」(十六丁表^{〔二七〕})の事跡と、それをもとに「著述家ダニール、デ、フリー」(同丁裏)が創作を行った経緯とが示された。「附載」は「魯敏遜の事蹟を考るに、原其人あるにあらざ」(十六丁表)と説き出されるが、一人称を用いない簡約本^{二八}を翻訳した本書において「魯敏遜」が実在の人物でないと説かれることは、実在の人物の手記と混同されるのを避けたのではなく、箕作阮甫の序が「或曰、魯敏遜本無其人。出名家達尼兒仮託之筆(或いは曰く、魯敏遜本其人無し。名家達尼兒仮託の筆に出ずと)」「魯敏遜漂流行紀略序」と結ばれるのと同様、漢文脈の小説観に則った読書がなされることを想定したものと見るべきであろう。「附載」は、ニューウェンホイスの記事の引用により、「魯敏遜」がセルカークに由来することを示し、本文の叙述を漢文脈の小説観に基づいて理解できるように補助する機能を有したのである。注意すべきは、古賀が「捏虚小説事」と訳した部分が「ロマン」(十六丁表)と訳され、「正史となく稗史となく華飾を主として人意に中すべく鋪張せる一種の文体」(同)と注を付けられたことである。「正史となく稗史となく」、すなわち「正史」「稗史」の区別なく、とすることは「正史」と「稗史」という枠組みが継承されていることを示すものであり、「正史」もしくは「稗史」において「華飾」を主眼とするものを「ロマン」とすることによって、セルカークが「魯敏遜」となることに伴う実事からの乖離と、実事への依拠という漢文脈における小説の前提との間の整合性を図ったものと見ることができよう。

『魯敏遜漂流行紀略』の出版は、蕃書調所の外部の読者に対して蘭書の世界を伝えるという啓蒙的意識に基づいてなされたと考えられる。それは、同年に蕃書調所において蘭学教育が開始されたこととおそらく無関係ではないだろう。

『魯敏遜漂流行紀略』が蘭学の初学者を対象読者として翻訳されたことは、原本が見童向けの簡約本であり、訳文の本文が十五丁のみであることからうかがえるが、「附載」の存在が示すように、読者として想定されたのは漢学を主とす

二六 国立国会図書館所蔵『市中取締類集』書籍之部四ノ上所収。翻字は、前掲『明治文化資料叢書』、三〇一頁。

二七 横山保三訳『魯敏遜漂流行紀略』(出雲寺文次郎・出雲寺万次郎、安政四年(一八五七))。以下、同書からの引用は丁のみ示す。

二八 松田清『魯敏遜漂流行紀略』(翻訳考)(京都古本や往来)第五十一、五十三、五十六、五十九号、一九九一年一月—一九九三年一月)参照。

る基礎的な学問を積んだ者であり、文字に通じていないような者ではなかった。これは、原書が「児童の嬉戯に供へしもの」(十八丁表)であることが明示される一方で、翻訳については「其章を逐ひ句を踏みて片言隻語も私に省かず加へず務めて原書に由循して之を翻せん」(同)とされるのみで、原書のように子供を対象読者としたとは述べられないことによっても支持されよう。その訳文は次のようなものであった。

魯敏遜屈律西は育ヨルケの地名英官貴國の貴族なり此人としわかきほどより遠く旅行せんタビアリキの企ありけり父その事をしりて側近くよびて汝イオン此国を離れて遠く旅行せんと思ふさまみゆ旅は憂ウツきものぞかしる辛苦クツに身をうちまかせてありかんこといと痛イタまし汝イオンの才能わが家にとままり居ワルとも必あるべきさまに身はたてつべき物ぞなどいさめこしらへけり

(一丁表〜裏)

訳者が原書を忠実に訳すことを意識し、「一種名づくべからざるの体」(十八丁裏)となつたと語るその文体は、漢語を用いつつ、平仮名表記の和語の多用と、「汝」のような訓の付加とによって、雅文としての和文体に則るよう書かれた。その文体を「頗有今昔物語之風(頗有今昔物語の風有り)」「(魯敏遜漂行紀略序)と評した箕作阮甫が「保三江都人、遂国学而善属国文(保三は江都の人、国学に遂くして善く国文を属す)」「(同)と記すように、そもそも訳者の横山は国学者として認められており、阮甫が「非余輩妄冒漢人口吻以成一種不可解之語之比也(余輩の妄りに漢人の口吻を冒して以て一種不可解の語を成すの比に非ざるなり)」「(同)と言うように、その文体は、漢学を基礎として学問をしていた者たちからも優れた文体とされるものであった。『魯敏遜漂行紀略』の翻訳において読者として想定されたのは、訳者たちと読書空間を共有していない蘭学の初学者たちであり、年少者を中心とする一般の初学者ではなかったのであった。

三、年少者の娯楽

『回世美談』がデフォー作の小説の翻訳であることは、「凡例」において、「此書ハ原本「ロビンソン、クルーソー」ト題セル狗兎僧カ紀行ニ係ル美談珍事ヲ集メタル小説ニシテ英国人「タニエールデホー」氏ガ著述ニ依ル所ナリ」と示

された。「凡例」にはまた、次のようなことが書かれた。

書中原意ノ冗長ニシテ幼者等却テ解シ難キモノハ之ヲ簡訳シ將タ原意ニシテ未ダ意味ヲ味フニ難キモノハ更ニ二三ノ略語ヲ挿ミ一層瞭明ニ為スガ如キ頗ル工風ニ係ル者アリ故ニ文体ノ如キモ勤テ俗咄ヲ本トセリ識者幸ニ嗤笑スル勿レ

二九 前掲『漂荒紀事』、二六七頁。この部分が原文になく、黒田が加えたものであることは、松田清「黒田麴廬研究のために」(『平田前掲書所収』、一三七)一三八頁参照。

『魯敏遜漂行紀略』の訳者は、原文に忠実に訳そうとしたため、訳文が「一種名づくべからざるの体」になったと断っていたが、ここで訳者が「識者幸ニ嗤笑スル勿レ」と言うのは、「幼者」にとつて読みやすいものにするため、「俗咄ヲ本」として訳文を作ったからであった。幕末期の翻訳者が読者の識字能力に注意を向けることがなかったのに対し、ここでは、学問に十分習熟していない「幼者」が読むことを想定し、それに合わせた訳文を作ることが宣言されたのである。

翻訳に際して、山田は原文の一人称による叙述を採用せず、語り手が「狗児僧」について語るといふ構造の文に改めた。その訳文の文体は次のようなものであった。

鉄士ノ思能ク金石ヲ透スト宜ナル哉茲ニ英国貴族ノ一子ナル「ロビンソン、狗児僧」ト云ヘル人アリ千六百三十二年「イヨルク」町ニ生タリ其父ハ小岡ニ依テ住スル「ベルメン」人ニテ元来此国ノ産ニハアラザリシサレド交易ノ為ニ数々英国ニ来リツ、遂ニ止リテ狗児僧ガ母ニ縁組セシ夫ヨリ人彼ヲ「ロビンソン」トゾ呼ニケル扱コノ狗児僧ハ初ノ名ヲ「ロビンソン、クルゾナア」ト呼ビケルガ其後国語ノ訛カラ自然ト狗児僧トゾ呼レケル自身ニモ左ハ極メシテソハ書キタリシ夫ヨリ彼ノ中間ニモ皆狗児僧ト呼ビタリケル

(第一回、一丁表(裏))

「宜ナル哉」までの部分は訳者による加筆である。「鉄士ノ思能ク金石ヲ透ス」とは、「志誠感之、通於金石(志誠にして之に感ずれば、金石に通ず)」(『孔子家語』六本)のように、意志の強いことを言う漢文脈由来の表現である。『漂荒紀事』の訳者である黒田が「四方ノ志アリ」(『和蘭訳者自叙』二九)と言ひ、箕作阮甫が「数経歴艱虞、流落窮島、顛沛委頓、阨窮不憫。[…]其才幹之茂、有卓越於尋常者(数艱虞を経歴し、窮島に流落し、顛沛委頓、阨窮して

憫えず。「…」其の才幹の茂んる、大いに尋常に卓越する者有り」（『魯敏遜漂流行紀略序』）と言ったように、「魯敏孫（遜）」は、航海に乗り出した大きな志と、島で生き延びた優れた才能と精神力とを持った人物として、漢文脈的な修辭と思考によって英雄化されて理解されていた。「鉄士ノ思能ク金石ヲ透ス」と始まる『回世美談』は、幕末期から形成された漢文脈的な英雄像を継承し、「狗児僧」を形象化したのであった。

訳文の文体は、「狗児僧」を英雄化する漢語を中心とする文体であり、漢文訓読体を基本とする一方、「ゾ」や「ケル」を交えた近世の読本に近い文体にもなっている。漢語を基本とする読本の文体は漢文脈的に英雄化された「狗児僧」について語る文体として相性が良いが、『回世美談』においては、「凡例」に「俗咄ヲ本トセリ」とあったように、その使用は文体の通俗化を図るという意味も持っていた。

第一回においては「狗児僧」のみにしかなかったルビが第二回から増加するなど、文体の通俗化は回の進行とともに進み、第三回に至って、漢字片仮名交じり文に代わって漢字平仮名交じり文が使用されるようになった。この変化は冒頭で述べた発兌書肆の交代に対応するものであったが、次のような文体の変化を伴うものでもあった。

扱も海賊は狗児僧が船に近づきよらんと舳から来るを間違へて船側の方から来りしが氣ついで返す其時に狗児僧並に船人らは折こそよけれ逃すなと船側に備し八門の大砲をこそ打發だせし係とところに賊方では二百余人の小賊に各小銃を持しめたれば此方にむかつて打たり去といづれも其間遠くて共に達ざりしは亦両幸とぞなりにける去ど狗児僧方の水夫らは元より滑稽の遊人なれば賊の威勢に怕をなして又と向はん勢なし

（第三回、十五丁表）

これは「狗児僧」が海賊の襲撃を受けた場面であり、「狗児僧方」と「賊方」という語句を用いて合戦の場面のような描写がなされる。「舳から来るを間違へて」以下は七五調を交えて記され、「大砲」、「打發だせし」、「両幸」のように、漢語に平易な訓を当てることもなされている。この場面は、漢字平仮名交じり文へと切り替わった第三回の初めに置かれていたが、第二回の末尾には、「扱是迄ハ発端ノコトナレバ余面白キ処ニ至ラザレトモコレヨリ追々妙味ニ入看客飽ズニ見玉ヘカシ」（第二回、十一丁裏）と書かれており、読本式の文体への傾斜は、通俗性と娯楽性双方の追求を原動力としてなされたのであった。

文体の変化を伴った、通俗性と並立する娯楽性の形成は、学問の蓄積がない年少者を想定読者としたことによって生

じたと考えられる。年少者を想定読者とすることは、実事に基づくものとして小説を読むという学問的な読書様式が取られないことを想定するということであり、年少者にとつての娯楽性を生み出すことが目指されたのである。

注目すべきは、翻訳に際して想定される読者および読書様式の差異が主人公の呼称の差異としても現れたことである。幕末期において主人公が「魯敏孫」（『漂荒紀事』）、「呂敏孫」（『孤島僻栖』）、「魯敏遜」（『魯敏遜漂行紀略』）と呼ばれたのに対し、『回世美談』においては「狗児僧」が呼称とされた。『回世美談』における呼称の選択が意図的になされたものであることは、新聞や雑誌に掲載された広告では、「此書は魯賓孫氏が世界見物の面白き歐洲雄名の書にて既に一回を發」（『朝野新聞』明治十年十二月十三日）、「盧賓孫氏の航海に係る面白き書なり」（『東京絵入新聞』明治十一年一月九日）、「今般既ニ魯賓孫氏ガ奇計賊手ヲ逃レ夫ヨリ怪物ニ出会迄出版」（『团团珍聞』五十八号、明治十一年四月二十七日）のように、「魯（盧）賓孫」が呼称とされた一方、『出版書目月報』に掲載された概要では、「英人クルソウ危難ヲ免レシ始末ヲ記ス」（第一号、明治十一年一月分）、「此篇ハ英人クルソウノ賊手ニ陥リ及ビ囚場ヲ脱セシ事ヲ記ス」（第三号、明治十一年三月分）のように、「クルソウ」が用いられたことからうかがえる。つまり、「狗児僧」とは『回世美談』のテキストにおいてのみ用いられる呼称であり、テキストが学問的な読書様式によって読まれるものとは異なるものであることを示す記号として機能したのである。

こうして、『回世美談』の翻訳において、年少者という幕末期とは異なる読者層を対象とすることによって、「魯（盧）賓孫」の事跡をもとにした小説を、「魯（盧）賓孫」を知らなくても楽しめる物語とすることが行われた。広告において「魯（盧）賓孫」という呼称を継承することが示すように、これは、幕末期以来、蕃書調所を中心に、漢文脈の小説観に則ってなされた『ロビンソン・クルソー』の受容に変化をもたらすためになされたわけではなく、年少者向けのテキストを作るという教育の意識によってなされたと見るべきであろう。蕃書調所を引き継いだ開成所ないし大学南校に在籍経験を持ち、教部省と私塾という教育に関わる場にいた訳者の山田は、蕃書調所を中心として受容された『ロビンソン・クルソー』を明治の年少者に届ける役割を担ったのである。

四、分章と語り

明治改元後、十年頃までに出版された物語類の訳者には、学校での教育活動に携わっていた者が多い。その中でも特

に目立つのは、山田と同じく旧幕臣で、徳川宗家とともに静岡に移住した静岡県士族たちである。たとえば、明治のベストセラーとなった『西国立志編』（明治三年～四年）の訳者である中村正直は静岡学問所の教授であり、静岡学問所と並ぶ洋学校であった沼津兵学校の教授である渡部温は『通俗伊蘇普物語』（明治六年）を出版した。また、沼津兵学校で学んだ後、海軍兵学校の教官となった永峰秀樹は、『アラビアンナイト』を『泰西夜物語』（明治八年）として翻訳し、永峰とともに沼津兵学校から海軍兵学校の教官となった^{三〇}中川将行も、チェンバーズ社 Robert and William Chambers の「シヨルト、ストーリーズ^{三一}」を『泰西世説』（明治七年）として翻訳した。静岡県士族以外にも、慶応義塾を開いた福沢諭吉にはチェンバーズの『The Moral Class-Book』（一八六〇）を訳した『童蒙をしへ草』（明治五年）があり、その門下の福沢英之助には『イソップ物語』を訳した『訓蒙話草』（明治六年）があった。

教育者たちの翻訳に共通するのは、西洋における初学者向けの読み物を原書としたこと、そして、短い話をまとめたものであったということである。『回世美談』はこれらとは異なり、長編作品を翻訳の対象としたが、全体を六十回に分けている点は、短い話の集合から成る翻訳幼学書との共通性をうかがわせる。章分けについては原書を襲った可能性もあるが、『全本ヲ分ツテ六十回トシ』（凡例）という言い方からして、六十回に分けたのは山田であったと考えられる。注目すべきは、第二回以降、それぞれの回を上下ないし中下に分け、それぞれに題を付けていることである。回の進行とともに娯楽性が増大したことを踏まえると、一回をさらに分けるといふこともまた、読者の読みを助けるという意識から生じたものと考えられ、山田は、長編を複数の章によって細かく分割することによって、短い話を読むことを基本とする読書形態を前提に長編の翻訳を試みたと言えらる。

このことは、複数の物語の集合であり、かつ全体として一つの長編でもある『アラビアンナイト』を翻訳した『暴夜物語』が『回世美談』と同様の文体の推移を見せることによっても示唆される。『暴夜物語』は二巻で中絶したが、巻之一では「昔シ佐々爾安ノ朝ニ一人ノ英主アリ此帝生レナガラ智仁勇ヲ兼備シ又幕下ニ勇将多ク臣民ハ之ヲ愛敬シ敵国ハ之ヲ恐怖シタリ^{三二}」のように、漢文訓読体に近かったのが、巻之二では「昔シ一人りの老父あり漁獵を生計となし其性固より正直にして又勤業者なりければ一日たりとも怠ることなかりしも得る利は細く家族は多く一人の妻に三人の子を養ひ兼ね家いと貧しく危き露命を其日々と漸くに繋ぎ留めたる計りなりき^{三三}」のように、読本式のものに変わっている。初学者向けの短編物語集の翻訳には、漢字平仮名交じり文で口語体の会話をを用いた『通俗伊蘇普物語』のようなものもあったが、『西国立志編』、『泰西世説』、『訓蒙話草』が漢字片仮名交じり文、『童蒙をしへ草』が初版では漢字平仮名交じり文であったのが『童蒙教草』と改称された再版（明治十三年）では漢字片仮名交じり文となったよう

三〇 柳田前掲書、二九四～二九五頁。

三一 「泰西世説新緒言」〔中川将行訳「泰西世説」〕巻之二、柳原喜兵衛・岡田文助、明治七年、一丁表。

三二 永峰秀樹訳『泰西夜物語』巻之一（山城屋政吉、明治八年）、一丁表。

三三 永峰秀樹訳『暴夜物語』巻之二（山城屋政吉、明治八年）、一丁表。

に、漢字片仮名交じり文を用いつつ、ルビの使用などによって初学者に配慮した訳文を作り出すものも多くあった。『暴夜物語』と『回世美談』はこれらと同様、漢字片仮名交じり文を出発点としつつ、全体が長編化することによって、漢字平仮名交じり文へと変化していったと見ることができるとはならないだろうか。

短いものから長いものへとという発想は、『暴夜物語』の訳者である永峰と行動を共にし、『泰西世説』を訳した中川が、原書について、「元ト兒童ヲシテ事ヲ記シ文ヲ学バシムル為メニ著ス所ノ書ナルヲ以テ其文章初メ短簡ニシテ後チ長演ニ至ルモノハ蓋シ読者ヲシテ漸ク佳境ニ入ラシメムガ為メナリ^{三四}」と述べていることにも見られる。ここでは、文を学ぶための階梯として「短簡」から「長演」へとという流れが示されているが、文を読むということにおいても、同様の階梯は考えられたであろう。このような段階的な学習の発想を支えとして、短編集から『暴夜物語』へ、そして『回世美談』へとという翻訳の流れが教育者たちによって形成されていったと考えられる。

以上のような分章の操作をする上で、語り手が「狗児僧」の物語を語り聞かせるといふスタイルは相性が良かった。『回世美談』の訳文が一人称で書かれなかったことに関しては、原文の表現構造の理解の問題^{三五}や、人称という概念の理解の問題^{三六}として捉えられてきたが、年少者への教育を意識した翻訳において選択されたものとして理解することができるのではないだろうか。

そもそも、全体を複数の回に分けるといふのは漢文脈における章回小説の基本的なスタイルであり、以上述べた分章の操作も、章回小説の応用としての側面を持っていた。『回世美談』の各回の末尾は次のようになっていた。

折シモ纜ヲ解キテ「バンバル」港ヲ出ルカ出ヌニ風吹出シ漸クニ海上高ク波打上ケサモ恐シゲナル形状ニ鳴渡リテ
ゾ来リケル
(第一回、八丁表)

狗児僧モ又アチラヘト漕走シガ海賊今ハ一致シテ一度ニドツト押来ル狗児僧余義ナク防戦ノ用意ヲ調ヘ自身ノ船ヲ省ミレバ十二ノ大砲二十八ノ滑稽人ノアリタリケル
(第二回、十二丁表裏)

斯て追々暗くなるに従がひて豈思きや向の浜べにて奇異なる叫声いとかわりたるさわぎせりこれを聞てぞジリイ

三四 前掲『泰西世説新編』、一丁表裏。

三五 宇佐美前掲論文。

三六 高橋前掲論文。

は深く驚おどろうちなげき殺ころさるべしとぞ啼なきにける

(第三回、二十丁裏)

狗兇僧夫れを受るうべく、心頻りにせき立ど夫を受けに出て彼等の姦計に当んかとしばし猶子を成て有し間に、彼等は向へ行ければ得たりと喜び送物を皆船中迄取り込し斯て彼等には暫くして亦集りて来りける

(第四回、二十五丁表～裏)

章回小説においては、それぞれの回の末尾で次回の導入となる新たな事件の発生が告げられるが、『回世美談』において次回の導入となる一文はすべて「ける」で終わっており、このような語りが一つの様式として用いられていることがわかる。このように様式化された語りによって物語を細分化しつつ、読者を次回へ誘導することは、読者を物語に引きつけるとともに、読者の読みを助けるものとなる。『回世美談』の語りは、漢文脈における章回小説の分章のスタイルが、短編を集めた西洋の児童向け本を訳した翻訳幼学書の系譜において用いられたものとも考えられる。それは、漢学を基礎として洋学を学んだ者たちが教育者となることによって形成された明治初期翻訳小説の語りのスタイルだったのである。

おわりに

他の西洋小説より早く幕末期から受容された『ロビンソン・クルーソー』は、小説を事実に基づくものとして捉える漢学的な読書様式によって読まれ、時にはその小説観と整合性を図りつつ、翻訳された。明治最初の翻訳である『回世美談』は、幕末期には想定されなかった年少者を対象読者とすることにより、漢学的な読書様式を例外的に考慮せず、通俗性と娯楽性を併せ持つ物語として翻訳を行った。その成立は、英学が蘭学に代わり、洋学が一般的な学問として位置づけられていく明治初期の教育空間の変動を背景として起こったものだと考えられ、今後は明治初期の小説翻訳における教育者たちの役割を再検討することが求められるだろう。

引用に際して、旧字体を新字体に改め、合字を二文字に書き改めた。
本研究はJSPS 科研費 JP17106618 の助成を受けたものである。